関西大學新報
発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話 (88) 2271
発行編集人　村井 弘二
(一部 10円)

古本全般売買
天牛本店
道頓堀中座前
電話 (06) 二七五八・九番

二部社会学部移転—分離政策

勤労学生の存立の否定へ

純い反応は危機

二部の社会学部学生が四月十日頃に完成する予定(土岡)のなかで、大学当局は二部社会学部の千里山移転といった二部の分離政策貫徹の意向である。

昨年、大学当局が社会学部を「関西社会学会の動向からみても"産業社会系列が時代の要請"に即している"」と、天六学舎の飽和状態にもかかわらず、にわかに二部にも社会学部設置へと切り換え、貫徹したことにより二部の社会学部の千里山移転の分離政策の一ヵ月程後に実施にみられるように、そこに一部の落想捨い化＝救済機関化へ、二部が制度的に勤労学生のしめつけと、生活と権利の侵犯をなしくずし的に変質してきている。

このような勤労学生の存立の場を根底から否定する大学当局の動向は、二部の社会学部の移転と二部の分離などを含めた広汎な一切の問題しせまっている。かかる情況下で問題への核心へ生産的追究がとられていない混雑な状況を通いつつ問題点への方向を追究したい。

千里山に社会学部学舎が四月十日頃に完成する予定(土岡)のなかで、大学当局は二部社会学部の千里山移転といった二部の分離政策貫徹の意向である。

昨年、大学当局が社会学部を「関西社会学会の動向からみても"産業社会系列が時代の要請"に即している"」と、天六学舎の飽和状態にもかかわらず、にわかに二部にも社会学部設置へと切り換え、貫徹したことにより二部の社会学部の千里山移転の分離政策の一ヵ月程後に実施にみられるように、そこに一部の落想捨い化＝救済機関化へ、二部が制度的に勤労学生のしめつけと、生活と権利の侵犯をなしくずし的に変質してきている。

このような勤労学生の存立の場を根底から否定する大学当局の動向は、二部の社会学部の移転と二部の分離などを含めた広汎な一切の問題と、終局には二部の移転問題がより現実性を帯びさせる契機となっている。

社会学部、教育学科の設置を、"産学協同"、"就職機関の拡大"といった資本に従順・協力する人間の養成の問題性と大学の規模の拡大化とマスプロ化といった経営主義を基底にした大学行政の中で、勤労学生の権利と生活が侵犯されている。

たとえば二部の入試期日が一部と一緒になったことにより、二部の勤労学生の存立が必然的に派生せざるをえない。

この情況下で一切の問題を除厳してきたこれまでの学友会執行部は、社会学部移転反対を表明している。それは一応天六学舎の飽和状態を認めながら反転して「使用していない教室が多分に見受けられ、選択課目の履修の考慮次第」で社会学部は移転しなくても十分できると結論を導きだしている。それでは大学当局に不開講科目の増大を余儀なくされてもよいと勤労学生に犠牲を大学ともども強いることにはならないだろうか。

さらに大学当局の分離政策を根本的に批判しえず(それはいたしかたないこと)、反対の表明をしておくといった後退的消極的態度ではないだろうか。だから千里山移転によって通学時間の点から文部省が考慮している夜間五年制への新しい制度化、万国博の交通網の完備などを反対に付加しても、それが反対とどう結びつくのか明らかでない。反面、民青系の社会学部反対にも、このことはいえないだろうか。

天六学舎の飽和状態は定員を減させ飽和状態を解決できるといっている。そして千里山移転を学長・土岡教授の反動路線によると規定し「千里山移転は断固やると言明した森川学長、なしくずし的に理事会の反動政策に迎合し、推進し、学生に何も利益をもたらさない政策ときっぱりと手を切り、学生の基本的根本的な生活と権利をまもり、教学の充実のためのヘゲモニーをとって私たちと手を取りあって進もうではないか」と。

これは「民主的な立場に立つものと「非民主的であるもの」に二分し、後者への批判は、日本共産党の政治路線、すなわち反米民族主義からの断罪といったきわめて政治主義的なやり方といえるのではなかろうか。

さて大学と産業あるいは資本の(論理)の結合といった「産業協同」の現実の大学は、財政自担者を学生に転嫁し、国家、ブルジョアジーに負担をかけない独立経営職業訓練所化＝に位置付けた。そこでは大学は広汎に学生をいかに平均的労働力＝商品として社会へ販売されるかというところにある。そして「産学協同」の関大法人の合理化政策の一環として貧困な天六学舎のもとで、勤労学生の生活と権利の侵犯と犠牲をいつり、今二部の分離と終局には二部の千里山移転問題がさしせまっている。そこでは、勤労学生のもっとも基本的な通学の便さえ犯されるといえる。

さらに大学は社会学部募集の人員を一五〇名として落想捨い化の増長を図っている。ところがこのように勤労学生の間にさしせまった二部社会学部移転に対して主体的な広汎な運動がとりえていないこと、この状況下で、文学部新聞学科二年生が「千里山移転反対」決議を大衆的に明らかにした。さらに社会学部有志も移転反対の大衆的ビラを被いている。

現在の状況下では、これらの集団は下からの運動として孤立的である。よしんば孤立的運動であっても状況の問題の核心へ迫りえなければ自分らの基本的態度を不問にするだろう。それゆえ孤立の点滅は自分をかもしだしているようであるが、反対から阻止という立場へ、そしてそれをいかに貫徹するのかという問題意識即ち勤労学生の存立の崩壊下で、勤労学生の存立のための大学民主化を鮮明化しすべて、勤労学生の各自主体的にかかわっていくことはできないといえる。

辻岡社会学部長代理談　「学長段階においては原定方針にもとづいて二部社会学部の移転が計画されているが、それを実施する社会学部としては更に技術的な検討を加え、慎重に慎重の上九月までに決定したい。技術的な検討としては、①通学＝千里山への通学条件が改善されれば天六学舎にいる必要性はないの自治、クラブ関係は悪影響を及ぼさないようにする③授業実施計画＝天六学舎の増築は建設上からみてほとんど不可能に近い。更に教室の能率的つかいかたによる移転しなくともすむだろう④環境＝教育環境としては千里山学舎がよい。しかし、二部の学生の移転の動向を考慮したいが、あまり学生の経営主義とか、産学協同とか騒がないでほしい」

不適当な献立

生協栄養士による佐伯食堂の調査

勤労学生の利用する食堂としての佐伯食堂の献立内容が価格面との関係において適正かどうか、また夕食として必要な栄養量を満たしているかどうか——六月三日関大生協の栄養士が佐伯食堂に出張して行われた調査の結果がまとまり、このほど発表された。

それによると栄養面においては二部生の大部分が勤労学生であるため、職場などで消耗する栄養量が大であり、特に精神的、肉体的消耗が激しいこと、また、昼食は短かい休憩時間に簡単なもので済ませている場合が多いことを考えると、勤労学生の夕食であるという特殊な条件が献立作成のさい、重視されねばならない。つまり、カロリーを多く必要とする以外に、①良質の蛋白質（魚肉類、卵類、乳製品類）②ビタミン類（緑黄野菜、果実）③ミネラル類（乳製品類、海草類、小魚類）が必要であるとされる。

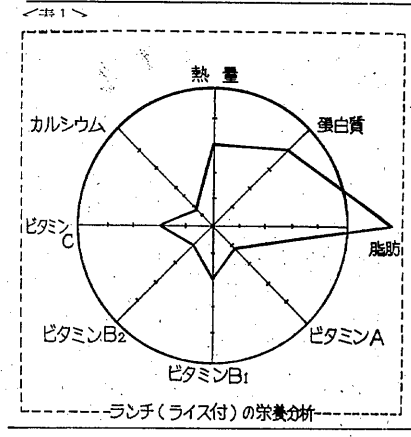
表1、2に示される佐伯食堂のランチの栄養分析結果と、栄養基準量の比較について、食事量と栄養配分を調一、昼一・五、夜一・五つまり昼食と夕食の比重を同じくした場合の夕食の基準量をランチの栄養量がはるかに下回っており、ランチ一品のみでは満足に栄養が摂取できない状態である。このため、アパート住などで、自宅通学の人に比べて栄養を十分に補給できない場合、このような貧弱な献立内容では多量の栄養失調者を出すおそれがあり非常に危険な状態であると警告されている。

次に価格面については、佐伯食堂の献立と同じ内容のものを関大生協が扱った場合、表3の通りはるかに安い売価で提供できる得ることが示されている。

以上の報告によると、栄養面については、分析した数字の示す通り、決して満足できない状態であることが明らかになったが、一方価格面においても、消費組合である関大生協と民間営利会社である佐伯食堂との立場の相違から、材料の仕入れルート、人件費、原価償却費、光熱費その他の条件によって、数字のみを取り上げて比較することはできないにしても、民間企業としての利潤追求と、学生食堂としての安くて良い物を提供するという相対する条件の、接点のギリギリの数字として見るとき、価格の適合度をたずねるよりも以前に、業者委託という制度そのものの是否を検討する必要があるだろう。

そしてまた、それは当然、われわれ勤労学生の日々圧迫されつつある生活を防衛する場としての生協組織の導入が再検討されねばならぬ今日において、関連して進められるべき問題と考えられる。

なお、この調査では調理場への立ち入り検査が行なわれなかったため、食堂の衛生管理、調理人の衛生意識の程度については明らかになってはいないが、食堂問題は栄養面、価格面、衛生面ともに、今後とも十分な検討が続けられねばならないであろう。



ランチ（ライス付）の栄養分析

<表2> 栄養基準量　(18～19歳男子、中労作)

		熱量	蛋白質	カルシューム	V.A	V.B1	V.B2	V.C	脂肪
基準量	1日の4要量	2,800 cal	90g	700mg	2,000 Iu	1.3mg	1.3mg	80mg	18g
	朝 (1.0)	700	25	170	500	0.32	0.32	20	
	昼 (1.5)	1,050	32	260	750	0.49	0.49	30	
	夕 (1.5)	1,050	33	270	750	0.49	0.49	30	比較 23.9
佐伯献立	ランチ過不足	634 (−)416	25.6 (−)7.4	28 (−)24.2	190 (−)560	0.19 (−)0.3	0.11 (−)0.38	14 (−)16	
一品料理の為め	稲荷寿司・巻寿司 バッテラ オムレツ (ライス別)	514	20.7	210	136	0.11	0.04	5	6.3
	野菜の煮付 (〃)	165	46.5	59	492	0.08	0.21	18	12.7
	ハムサラダ (〃)	149	5.5	34	163	0.13	0.06	23	0.5
	鯨カツ (〃)	83	2.8	14	91	0.05	0.02	16	5.0
		318	8.2	17	3	0.10	0.06	5	21.7

比較のため一品料理の為めにはなりません。

<表3> 価格面より見た現状分析

献立名	材料名と分量	関大生協との比較 佐伯食堂 売価	佐伯食堂 原価	佐伯食堂 G/P	関大生協 売価	関大生協 原価	関大生協 G/P	備考
①ランチ(付ライス)	豚カツ(豚肉15小麦粉パン粉油)貝柱天婦羅(貝柱5)ボイル卵(12)ポテトサラダ(ポテト15胡瓜2ハム1玉ネギ1キャベツ)コールスロー(キャベツ15)トマト(5)ハム(1/2)	80.0	32.58	59.3	55.0	33.00	40	
②稲荷寿司と巻寿司とバッテラ	うす揚(1.5枚)午蒙黒糖胡麻、ライス、鯖、昆布、酢、砂糖、ライス、高野豆腐、巻ほうれん草、かんぴょう7枚、紅生姜等	70.0	38.04	45.6	65.0	39.00	40	
③オムレツ	卵(60) キャベツ(15) 玉ネギ(15) ミシチ(5) 油、キャベツ(15)	30.0	13.26	55.8	25.0	15.00	40	1.70円の分だけもう少し良い物が作れます
④野菜の煮付	ポテト(85) 竹輪(15) 南瓜(40) 三度豆(10)	30.0	14.15	52.8	25.0	15.00	40	
⑤鯨カツ	鯨(20) 小麦粉、油、キャベツ(10)	25.0	8.08	65.6	15.0	9.00	40	
⑥ハムサラダ	ハム(10) 人参(5) ポテト(30) キャベツ(20) 胡瓜(5) マヨネーズ(5)	25.0	6.86	72.5	11.0	6.60	40	

上記表は御覧の通り関大生協と佐伯食堂との比較です。佐伯食堂の仕入の方法の良否にもよりますが、一応関大生協の仕入価格を基準として、これだけの原材料使用してから、関大生協ではこれだけの低価格の供給をする事が可能です。

論説

国際関係の転換　民主主義の危機

(一)

南ベトナムにおける民族解放闘争、解放戦争に反対する、米帝国主義によるベトナム侵略戦争は、北爆、無差別爆撃、非武装地帯とエスカレーションする中で最早「現越」さえも存せずベトナムは殺りゃくと硝煙に煙り、東南アジア全体へと煙が波及し、勃発する情況は、ベトナム戦争の解決が北爆停止にのみあるがごとき主張そのものが幻想でしかなかったということの確証である。

ベトナム戦争をとりまく情況は、ガーナやアルジェリアにおける右派勢力の政権奪取に見られる後進国解放闘争の後退であり、九・三〇事件後のインドネシアというふうに国際的状況は決定的に中共の中国孤立策「総路線」の破綻を顕在化させ、かかる中共の不利な情勢の進展の中で、日共らの反転——「自主独立路線——とビルマの反中国騒動と、中国の孤立化というよりも中国の自閉＝逆ドミノ現象＝を呈している。全体的な後進国解放闘争の後退化現象であって、米ソ首脳会議の"グラスボロ"は革命的でないソ連圏の防衛（毎日）として米ソ平和共存体制の確認のもと現在中南米などの解放闘争の抑圧的行為となっている。

日帝は米帝と相対的劣勢な同盟を組みつつ、アジアに対する独自の利益の確保をめざし、新植民地主義＝独占のブロックの追求という日本資本主義の現段階があり、それが佐藤首相の訪「韓」であり米帝を盟主とした日、「韓」、「台湾」の四国会議である。それを支えるのが世界市場分割の本格化に対しての国化＝生産性向上支持と、国益民族の秩序の確保を主張であり、資本主義体制の秩序の確保を掲げ、（日共はこれに左から民族自立独立をもって、対置するとき空想的にはあったが現代が民族的問題であるかの如く倒錯させて"民族"のもとに吸収されている）さらに、国防問題においては第三次防衛計画にみられるごとく自主防衛を掲げ民社、公明にみられるように国粋＝自主独立＝防衛＝現実主義（福祉国家）を吸収している。

情勢は、反民主主義、反革命的状況において日ごとベトナムの硝煙の匂いとともに確実に危機的情況下である。

(二)

米帝のベトナム侵略戦争と日帝の独自の侵略の野望を秘めた加担の多面化に対する"民主主義"はどうなのであろうか。

砂川＝沖縄＝金東希＝そこには、現実のおかれた重みの縮図がある。

日本における基地が直接ベトナムの侵略戦争の補給基地から前線基地としての拠点となっていることは否めない事実となっている。

それは日本における安保条約＝軍事基地、その利用、拡張、強化としての沖縄基地はその"要"であり、砂川闘争の拡張は沖縄の連続線上にある。それ故沖縄は「施政権返還要求」「祖国復帰」は、分離政策の改良としてではなく、闘争をうばい、平和をうばうそのものに対する実力闘争への昂揚でなければならないだろう。現代の核心＝民主主義＝に迫りえる運動でなければならないだろう。

そして韓国民衆帝の日本＜＝命＞の立国関係の図式を強徴し、日本＜政府＞は「韓国＝人政府＞＝強制送還、銃殺＜死＞は平和憲法の空洞化の危機から法そのものへの幻想の崩壊状況のなかで、それは民主主義の全般的危機のなかであって、現在一つの試練期といえる。

「民主主義の危機」は古典的民主主義の回復ではありえない。古典的民主主義への復古的状況であり、本来的な民主主義の現実が物質化されなければ、ベトナム、アジアと日本のプルジョアジーにつきまとうような臭い硝煙の匂いに対する反発を生み出しえても、日常の擬制の平和な関係にとり入れることが最大の罪だという歴史的に終焉してしまう結果になる。ここにおいて反戦闘争は臭い主義の危機である。

大学人による大学の拒否

千里山からの報告

生協靴部事件

文学部教授会は、六月二十四日一部文学部学生二人に対して、二ヵ月間の停学、四人に対して、戒告の処分を、決定した。これは三月三十一日の生協靴部撤去のさい、学生の「行動」に対して、とられたものであるが、すでにこのことについては、当事者間で、解決済みであるにもかかわらず、三ヵ月を経過した今頃、なぜこのような処分が発せられたのであろうか。この処分を不当とする学生側は「不当処分撤回全学協議会」を組織し、処分撤回をめぐって、千里山は、今、大きく揺れ動いている。

生協靴部は従来、業者によって経営されてきたが、学生の間に不満の溜も多く、生協側は、これを打開とすべく、業者に対して、交渉を申し入れていたが、業者側の拒否により、事態は進展しないまま、四十二年二月、生協理事会は委任解除の最終通告を、文書をもって、発送した。三月三十一日の学生の行動は、これに基づいて、とられたもので、これについては、すでに、解決がついている。

四月七日、大学総務局立会いのもとにとられた確認書をみてみると、「四十二年四月をもって生協は靴部を撤退し、業者に対しては保障金として五十万円を支払うこと。業者が以後、学内で営業する意志のある場合は、総務局と業者の間で、これを処理する。及び三月三十一日の商品荷物の移動に関しては、今後一切、問題としない」とある。

これが生協靴部事件の経過であるが、このことに大学当局（学生部）が介入してきたことによって問題は単に生協、一部文学部のみにとどまらず、関西大学学生自身へ、「大学の自治」そのものへと迫ってきたわけである。

学生部、教授会は、次のような点をとり上げ、学生に対する処分を決定した。「学生の行った行為は「暴力業務妨害」であり、その行為は、学生としてあるまじきものである」このような当局の主観的等えによって、二名の学生に対して、先に述べた処分がとられた。

この当局の動向に対し、学生側は、処分撤回を要求して、文学部経済学部、商学部、社会学部自治会、法学部反戦闘争委員会、図書委員会、新聞会、生協組織部などによる「不当処分撤回全学協議会」を結成し、処分撤回を要求して、広汎な運動に発展させている。

さて六月二十四日、午後三時から突に九時間を費しての、全学協と学生部との団交で、当局は、その無定見さと、大学自治に対する彼らの後退姿勢を暴露した。以下両者のやりとりを拾ってみよう。

全学協「処分の理由は何か」学生部「実行委員を行なったことである」

「なぜ悪いのか」「国法の下では認められない」

「それは裁判所と同じ立場だ。本来大学が自治を主張し、外部の介入を拒否するのはなぜか」「問題が大きくなれば国家権力の介入はある」

「大学は国家や社会に対して常に批判的に、新しい思想や行為を生みだす場ではないか」「考えや思想として持つことはよいが、行為に移すことは許されない」

「当局が認めない限り、学生は無条件に絶対服従せよということか。」

「そうだ」

「当局だけが絶対的権限を持ち、学生が何もできないのは不合理だ。」「そうだが、必要と考えるなら、裁判所へ持ち込めば良い。」

「なぜ大学では当局が絶対的権限を持っているのか。それは、教育的、道徳的に高いという前提に立つのか。」「それだからは、これまでの大学の歩んできた過程で、そのような内容が、果されてきたと考えているのか。」「人間には誤りがあり現在の関大には足きねばならない矛盾や誤りは非常に多い。」、

このように、当局は常に「行為」を問題とし、その「行為」の前提となる「思想」そのものも否定しようとしていると処分撤回の声が大きく広汎に各自治会などに支持されている。これは大学のもう本来的な意義「創造」と「変革」が、ここではもはや忘れられており、関大の一枚看板「自治」が、「大学」の不花化現象、自治の崩壊は何よりもまず、われわれ自身の手で、行動で、くい止めねばならないえるのではないだろうか。そしてそれは「お願い」としていくのではなく「獲得」していくものとして展開している。

七月三日　学生大会開く

春季学生大会は、去る七月三日午後七時すぎより開かれ、出席学生五百名足らずのもと、体育会執行部のなしくずし議決の連続に終始した。

議決は、一、昭和四十一年度経過報告二、同決算報告三、昭和四十二年度活動方針四、同活動予算、五、同学友会役員、の順で行われた。大会議案書が、前々日の土曜日になって初めて、一般学生に配布されたということや、また学生大会開催の伝達を、熟行部が、一般学生へ向けて十分になしていなかったことは、明らかに、熟行部のサボタージュと批判されても否めないであろう。

議案書の内容、総括的にいえば総花的ではあるが、現在の関大二部における危機状況＝勤労学生の学問の場の喪失と、大学教育の形骸化＝へ、いかに、学生が、主体として切開していくのかという論理、政策の展開が不十分であるといえるであろう。

進行する二部の危機状況に対する対応のない、それへの意志のないところその、学生大衆を無視した論議は、ある程度無責任といえるであろう。

喫茶室設置の早急な措置の、学校当局への要望書（案）も付加され、これまで過去問題となりながらも消えなっていたが、どのように運動を進めるのか注目をあびる。

学費値上げに対して、学友会は、理事会は、今年学費値上げしないと説明した。

予算案議案後、議長が一方的な大会打ち切りを宣したため、これを不満として、浜崎君（文四）が、まだ終っていないとマイクで発言すると、議長団から、指名しないのに発言することを禁ずるとマイクをとりあげるなどの騒動が起った。

このような非民主的措置の議長団の態度は、批判されてもしかたがないといえる。

学友会予算の配分を行なう評議会は利益パートのみの利益追求の支配下にある。予算の獲得のみを目的とする利益パート努力の偶像化した自治活動はその本来的機能を果しえず、学生を自治から遊離した彼岸へ追いやり、学友会は無用の長物と化し存在価値さえ失なった状況が弊害として、これへの打開の努力はとられず馴合いが生じ、あらゆる提案は無為なものとしているのが特長である。

そこでは存立価値の喪失した学友会は多数派による非民主主義的な慣行が行なわれている。

新報社に対する露骨極まる報道、編集権の侵害にみられる問題のようにただ学友会執行部を支持するものでなければ活動の死活にかかわる程の予算削減を行なうという極めて政治主義的なやり方であり、私物化というそしりをまぬかれえないのであり、このようなデタラメな、非民主的性格のもとに行なわれ過去一貫して続けられている。学友会費納入者と利益パートの支配下にある学友会予算の断層がある。

予算大幅削減新報社。増額、文化会、学術研究会、弁論部、応援団。去年同額維持、女子同好会、体育会。

学声春秋

▲第二次大戦後の日本の高度成長に対して、日本は、生活水準の向上とか豪華ムードとかの反相対的現象にどっぷり身を沈め、政治の腐敗や政府の頽落にも不感症にされてしまってそういえるであろうか▲ベトナム戦争を、隣の家の喧嘩として傍観しているうちに、すでに自分が彼らにとって中立として存在し得ず、そのうちに手を伸ばす被目に陥ってしまっている。ベトコンの胸を打ち抜く弾丸を作り、物資を輸送し、また軍事基地を存在するのはなぜか。このように、雪崩式行動の一致しない現在日本の歪曲した政治の下で、「現実とはそういったもの」とか「だから民衆へ闘かわなければ」と主体を放棄して

世界と存在についての観念を変革せよ

「黒い雨」「ヒロシマ・ノート」「地の群れ」に……

触発される核爆発の想念

川桐信彦

原子爆弾のキノコ雲が大都市の頭上を覆い、その下では閃光によって、コンクリートの壁に人間の影がそのまま焼きつき、人間の足だけが二本、ぴったりとアスファルトの路上にはりついてつっ立ち敬礼姿のまま立っている兵士たちの肩をたたくと、さらさらと彼らはくずれ落ちるのである。爆心地のできごとを伝える人は誰一人いない完全抹殺の武器が完成し、原爆の語感さえ古めかしさを感じさせる数倍数十倍の威力を持つ水爆の時代に入ったのだ、原爆の瞬間的高熱によってもたらされた死以外に、それによる後遺症によって、体中にぶつぶつの斑点が生じ、頭髪が抜け、腹部が異常に肥大し、力がすっかり抜けるだるさと共に死が訪れるあの微既的に人間性だの人格だの意志だの生命の尊厳だのを完全に否定する行為が現代だのこの地上において遂行されたのである。

以来、ヒロシマとナガサキの地名は世界的となり、戦争や平和についての論議は、この地名とそれに結びつく原爆の機能性を核としてなされて来たともいえる。水爆への威力の増加現象が、さらには風俗的刹那主義や、一般的に政治についての不信感や、前衛芸術のテーマにも強大な影響をもたらし、原爆を使用した人類は、その時点以後、人間についての思想やモラルに大きな変革現象を呈した事実は否定できない。そして、とすれば、またかという位に原爆についての言論は耳なれたものとなり、あるいは芸術上のテーマ性についても、原爆に触れることから早く脱却したいような、むしろそのことを自体がテーマとなることをさけたがる傾向さえも生じている。

だが、人間の本質や、平和について論ずるとき、この大量殺人と完全破壊を可能とする爆弾を、現に人類が保有している状況は、古いこと、繰り返されるべきないテーマであることなどとはいえまい。むしろ、私自身の反省をも含めて、このような状況は、いっそう自覚的に透視されるべきであるし、それについての行動的現象が一部の平和論者間のテーマであってもよいのか。

アメリカ空軍の爆撃によって、黒こげの死体となった胎児を抱えた、北ベトナムの男達の写真を目撃したとき、私は反発的なやるせなさを感じた。

アメリカ政府の誤算

「九十五歳のイギリス野郎とゲームをする酔狂をもちあわせていない」

バートランド・ラッセル提唱の国際戦犯裁判がストックホルムで開かれた時に、ジョンソン大統領がホワイトハウスに新聞記者を集めて語った言葉だという。ラッセルがこの裁判を提唱してからアメリカ政府がこれにたいして一貫してとった態度は、このジョンソンの発言に典型的に示されるようなものであった。しかし、法廷がストックホルムで開かれていた十日ほどの間に、アメリカ政府はこの態度を改めなければならなかった。「ニューヨークタイムス」をはじめとするアメリカの大新聞も「ルモンド」をはじめとするフランスの大新聞も「タイムス」「ガーディアン」といったイギリスの新聞も、法廷の進行状況を詳細に報道し、これがアメリカ、ヨーロッパ、ソビエトのセンセーションをまき起していったからであった。

法廷では、アメリカが一九五四年のジュネーブ協定さえも無視して、ベトナム国民の主権をおかす侵略の罪をおかしていることが、ジュネーブ協定のベトナム側代表ハー・ヴァン・ロウなどの証言によって明らかにされていった。ベトナム人民の民族的基本権利が侵害されていることも、国際法の権威である元ローマ大学教授レリオ・バッソーなどによって指摘された。アメリカの北爆が、病院・学校・寺院・教会・堤防・一般民家などたいして計画的・組織的になされていることも明らかになった。南ベトナムからやってきたナパーム爆弾の被害者が全身ケロイドにつつまれている姿は、北ベトナムからやってきた小学生が半身を爆弾で大火傷している姿とともに、各国の新聞の写真で伝えられた。そして、アメリカ軍が人命を殺傷するだけの目的で使われるパイナップル爆弾やボール爆弾を大量に投下していることが、そのサンプルの写真とともに報道されるにいたって、アメリカ政府は、もはや、この法廷を嘲笑し、無視し続けることができなくなった。

アメリカ政府は、法廷を正式にとりあげて、このように国際法に違害する戦争の使用を認めながら、その使用目的が法廷で指摘されているほど大罪ではないという弁明を発表しなければならなかったのである。法廷が世論におよぼした影響力の前に、このような弾劾を採択しようとしたアメリカ政府の卑劣な努力は敗北したのであった。

法廷にたいする疑念

ラッセルが提唱した国際戦犯裁判は、これまでの国際戦犯裁判と非常に異るものであった。これまでの戦犯裁判が戦勝国によって行われたのにたいして、この裁判は国家権力を基礎としないものであった。この法廷を構成する人達がいかなる国家権力をも背景としない知識人に属さないだけでなく、この法廷は、どの国からも経済的支援を受けることを拒否していたからであろう。どうしてこのような法廷が、実際に、アメリカ政府などの妨害と嘲笑を跳って、世論に大きな影響をおよぼし、アメリカ政府の卑劣な企図をも粉砕できたのであるか。これは、法廷を貫く理念の力と、法廷とベトナム反戦運動との相互関係に関する理解にかかわることである。

欧米のベトナム反戦運動におよぼした影響

法廷が昨年十一月に最初の会議をロンドンで開いて、その目的と構成を明らかにする頃まで、ヨーロッパのベトナム闘争の大部分はアメリカ軍の犯罪を弾劾しようという理念とは異なった考え方におわれていた。

ラッセルの住むイギリスにおいてもそうであった。昨年秋の労働党大会で、ウィルソンは、ベトナム問題をめぐって激しい批判に直面しなければならなかった。しかしウィルソン批判は、イギリスがアメリカのベトナム侵略に加担しているのを止め、早期停戦を実現するために重要な役割を果すべきだと主張するものであった。アメリカの行為がどれほど無法なものであろうとも、これを弾劾し攻撃することよりも、とにもかくにも戦闘行為を中止させることのほうが重要だという考え方が支配的であった。ラッセルの提唱は、むしろ、早期停戦を妨げるものだと批判する空気が強かった。

しかし、法廷がその目的と構成を明らかにして、実際の活動を開始する頃には、ベトナム闘争はかなり異ったものに変わりつつあった。法廷のロンドン会議の直後にエディンバラで開かれたベトナム・ソリダリティ・キャンペーンのスコットランド大会は、この変化を劇的に示すものであった。

ベトナム・ソリダリティ・キャンペーンは、ベトナムの平和はまずベトナム人民以外の誰もベトナム人民に彼等の欲しない平和を強制することはできないと主張していた。そして、ベトナム人民と連帯し帝国主義と闘うことを誓っていた。このエディンバラ大会には、スコットランドのほとんどすべての労働組合と左翼政党が参加した。

バッハの音楽やゴッホの全生涯によって、あるいは「奇跡の丘」という映画作品によって、われわれはキリストという存在を適格に激烈に、印象深く知覚できるように、この未曾有の体験を見据える眼を持てなかったゆえに、無数に書かれた原爆についての習作は、いずれも文学になっていないが、井伏は平常心という「忘れ晴れることによって、はじめてこの異常事の輪郭を見定めたゾ」と評しているのも、前にのべたようなことを指摘しているのだ。幾人かの個人の生活の物語を通じ、その苦しい日々に対する警告の目が、力や表現上の個性が驚然とした明瞭さを持つ井伏の語り口には、井上光晴などのおよばぬ高向からの正視の居すまいを感じさせ、テーマ小説や観念過剰さの持つ弱点をあばく迫力があり、最初に触れた「黒い雨」を評して入原爆という観念、あるいは「悲惨」という情緒に依存して、この未曾有の体験を発掘する眼力を持てなかったゾ」ために、原爆の持つ非倫理性、不条理その時点から招来される人間観や発展についてのイメージを芸術作品によって警示されることもあり得る。

大江の「ヒロシマ・ノート」とともに、井伏の「黒い雨」という小説も、われわれの抱く原爆やヒロシマについての認識を一そう深めさせる。病状やそれに対する処置や、それによって変革を来した日常性などが、平凡な市民の生を追究することによって「黒い雨」は妥当な感覚で原爆の核心に触れさせる。

文芸評論家江藤淳は、「黒い雨」を評して入原爆という観念、あるいは「悲惨」という情緒に依存して死と直面させられた無辜な人間の存在に、こうしたいきどおり感情が素朴にほとばしることが文学や演劇の持つ「性格」の一端だと私は信じたのだが、武力行為による「人間の死」について、戦略家や政治家や資本家の感じ方や考察の具合が、そのニュアンスにおいて食いちがってくることくらいは言も承知である。

あのいいようのないきどおりの感情が潜在していて、詩やドラマについての感受性を保証するものだという素朴な信仰を、私は感動や美しさについての人間の経験を、貴重な「価値」とするが故に抱き続けたいのだし、「ヒロシマ・ノート」や「黒い雨」や、原爆に関する絵画、映画、演劇の発想もまた、その基底にはこのすさまじい感情が発火点になっているのだと考える。大江はそのエッセイ集「厳粛な綱渡り」の中で入土門拳の『ヒロシマ』が戦争体験の芸術的具体化という問題についてまも足ぶみを続けている日本の文学者を、いかにみごとに凌駕したかを語りたいゾと述べ、土門の作品に「島のように清潔で美しい少年」の生と死を描いた写真があって、その作品が示すもの、この少年にとって「人間世界は、暴力的に希望の芽をおしつぶす不可解な地獄でしかなかった」と続けている。

戦争の死はロマンチシズムとは現実的に縁遠い。いや無防備な場合の突発的な死がもたらすものは醜悪でボロ切れのような、無価値化された肉体の残骸と虚無であって、映画などでいう「殺しの美学」に照応する性質のものではない。ヒロシマについては、アラン・レネの秀作「二十四時間の情事」があり、広島の巨大な、自豪感のように法外な性質と、フランスのネヴェールの町でのラヴ・ロマンスを対置させ、ヒロシマの日本人と、ネヴェールのフランス女の、官能的で清純ですはらしく美しい関係を結合させる。

そして、原爆の破壊のシンボルであるヒロシマでの出会いと別れを通して、挫折感の真の根源を示そうとする。愛の挫折、人間の日常生活の木毛の中へと帰ろうとする姿勢と、原爆という徹底破壊の行為の中に、女のラヴ・ロマンスという非政治性の持つ個人主義がそして現代という歴史が荷っている混沌と非合理性があばかれる。

だが、芸術というものは、常に自己の存在の真の条件に対する人間の闘争であり、疎外された人間はこの闘争を放棄するか、または闘争の方法を知らない。だとすれば、ヒロシマについて書き続けることは、この闘争の不可避的現われである。しかも芸術は、最も痛切無残な状況におけるユーモアを放棄しない。同時に、問題や状況の直視をも恐れないはずだ。

ヒロシマの問題だからといって極端な前衛や不条理感の体験による目くらまし姿除去すべきである。大江は「ヒロシマ・ノート」のプロローグで「自分自身の感覚とモラルと思想とを、すべて単一に広島のヤキバにかけ、広島のレンズをとおして再検討することを望んだ」と述べている。「ヒロシマ・ノート」にしても井伏鱒二の「黒い雨」にしても、芸術家の持つ嗅覚と想像力とが、そして最も重要な事柄は、それらを触発する、醜悪と悪惨に生々しく感性と空想力と自己の内面をぶち当てた「精神の働き」という現象を招来した作品だと言える。

それは大江や井伏に対する文学的な意味での先入観の働きさえ、時停止させるような要素が存在したことを告白しなければならない。アラン・レネでさえ、その他私の知る作曲家でさえ、芸術性を通じて人間やそのもたらした行為の結果を、卓越した手法によって再現させ、その意味性と美の中に、外内の人間の救済を追究する。

「ヒロシマ・ノート」のプロローグには、さらに広島内部の知識人として、皮膚科の医師松坂氏の「原爆でなくとも、戦争を経過した人達は、程度の差はあれ、辛酸をなめていることであろう。私はとくに広島の被爆者のみの、被爆者意識というか、なにか甘えた感情があってはならない」という文章が掲載され、「原爆後遺症」として認識されることは、一つの人間に対する寄与であり、またそのことは人間の少くとも最小限度の知性的行為の前衛であるといえる。さまざまな形の暴力と戦争は、あらゆる世紀に現出したが、人間は、極端な事例によってのみ猛然なイメージと発想を生じる傾向のあることは事実である。それは、生と死、戦争と平和、愛と憎悪、思想と虚無、イデオロギーとイデア、芸術上のシャンゲルについても同様である。

存して、この未曾有の体験を見据える眼を持てなかったゾ」ために、無数に書かれた原爆についての習作は、いずれも文学になっていないが、井伏は平常心という「忘れ晴れることによって、はじめてこの異常事の輪郭を見定めたゾ」と評しているのも、前にのべたようなことを指摘しているのだ。幾人かの個人の生活の物語を通じ、その苦しい日々に対する警告の目が、力や表現上の個性が驚然とした明瞭さを持つ井伏の語り口には、井上光晴などのおよばぬ高向からの正視の居すまいを感じさせ、テーマ小説や観念過剰さの持つ弱点をあばく迫力があり、最初に触れた「黒い雨」を評して入原爆という観念、あるいは「悲惨」という情緒に依存して死と直面させられた無辜な人間の存在に、こうしたいきどおり感情が素朴にほとばしることが文学や演劇の持つ「性格」の一端だと私は信じたのだが、武力行為による「人間の死」について、戦略家や政治家や資本家の感じ方や考察の具合が、そのニュアンスにおいて食いちがってくることくらいは言も承知である。

あのいいようのないきどおりの感情が潜在していて、詩やドラマについての感受性を保証するものだという素朴な信仰を、私は感動や美しさについての人間の経験を、貴重な「価値」とするが故に抱き続けたいのだし、「ヒロシマ・ノート」や「黒い雨」や、原爆に関する絵画、映画、演劇の発想もまた、その基底にはこのすさまじい感情が発火点になっているのだと考える。大江はそのエッセイ集「厳粛な綱渡り」の中で入土門拳の『ヒロシマ』が戦争体験の芸術的具体化という問題についてまも足ぶみを続けている日本の文学者を、いかにみごとに凌駕したかを語りたいゾと述べ、土門の作品に「島のように清潔で美しい少年」の生と死を描いた写真があって、その作品が示すもの、この少年にとって「人間世界は、暴力的に希望の芽をおしつぶす不可解な地獄でしかなかった」と続けている。

戦争の死はロマンチシズムとは現実的に縁遠い。いや無防備な場合の突発的な死がもたらすものは醜悪でボロ切れのような、無価値化された肉体の残骸と虚無であって、映画などでいう「殺しの美学」に照応する性質のものではない。ヒロシマについては、アラン・レネの秀作「二十四時間の情事」があり、広島の巨大な、自豪感のように法外な性質と、フランスのネヴェールの町でのラヴ・ロマンスを対置させ、ヒロシマの日本人と、ネヴェールのフランス女の、官能的で清純ですはらしく美しい関係を結合させる。

そして、原爆の破壊のシンボルであるヒロシマでの出会いと別れを通して、挫折感の真の根源を示そうとする。愛の挫折、人間の日常生活の木毛の中へと帰ろうとする姿勢と、原爆という徹底破壊の行為の中に、女のラヴ・ロマンスという非政治性の持つ個人主義がそして現代という歴史が荷っている混沌と非合理性があばかれる。

だが、芸術というものは、常に自己の存在の真の条件に対する人間の闘争であり、疎外された人間はこの闘争を放棄するか、または闘争の方法を知らない。だとすれば、ヒロシマについて書き続けることは、この闘争の不可避的現われである。しかも芸術は、最も痛切無残な状況におけるユーモアを放棄しない。同時に、問題や状況の直視をも恐れないはずだ。

ヒロシマの問題だからといって極端な前衛や不条理感の体験による目くらまし姿除去すべきである。大江は「ヒロシマ・ノート」の

欧米のベトナム反戦運動

ラッセル国際戦犯法廷の意義

鶴嶋雪嶺

ロッセルの提唱した国際戦犯裁判は、これまでの国際戦犯裁判と非常に異るものであった。これまでの戦犯裁判が戦勝国によって行われたのにたいして、この裁判は国家権力を基礎としないものであった。この法廷を構成する人達がいかなる国家権力をも背景としない知識人に属さないだけでなく、この法廷は、どの国からも経済的支援を受けることを拒否していたからであろう。どうしてこのような法廷が、実際に、アメリカ政府などの妨害と嘲笑を跳って、世論に大きな影響をおよぼし、アメリカ政府の卑劣な企図をも粉砕できたのであるか。これは、法廷を貫く理念の力と、法廷とベトナム反戦運動との相互関係に関する理解にかかわることである。

欧米のベトナム反戦運動におよぼした影響

法廷が昨年十一月に最初の会議をロンドンで開いて、その目的と構成を明らかにする頃まで、ヨーロッパのベトナム闘争の大部分はアメリカ軍の犯罪を弾劾しようという理念とは異なった考え方におわれていた。

ラッセルの住むイギリスにおいてもそうであった。昨年秋の労働党大会で、ウィルソンは、ベトナム問題をめぐって激しい批判に直面しなければならなかった。しかしウィルソン批判は、イギリスがアメリカのベトナム侵略に加担しているのを止め、早期停戦を実現するために重要な役割を果すべきだと主張するものであった。アメリカの行為がどれほど無法なものであろうとも、これを弾劾し攻撃することよりも、とにもかくにも戦闘行為を中止させることのほうが重要だという考え方が支配的であった。ラッセルの提唱は、むしろ、早期停戦を妨げるものだと批判する空気が強かった。

しかし、法廷がその目的と構成を明らかにして、実際の活動を開始する頃には、ベトナム闘争はかなり異ったものに変わりつつあった。法廷のロンドン会議の直後にエディンバラで開かれたベトナム・ソリダリティ・キャンペーンのスコットランド大会は、この変化を劇的に示すものであった。

ベトナム・ソリダリティ・キャンペーンは、ベトナムの平和はまずベトナム人民以外の誰もベトナム人民に彼等の欲しない平和を強制することはできないと主張していた。そして、ベトナム人民と連帯し帝国主義と闘うことを誓っていた。このエディンバラ大会には、スコットランドのほとんどすべての労働組合と左翼政党が参加した。

ベトナム委員会が急遽にのび て行った。この委員会が十一月にパリで「ベトナムのための不時間」集会を呼びかけた時には、まだ、この組織の前途をあやぶむ人が少くなかった。フランスの労働運動と平和運動に大きな影響力をもつ共産党と平和委員会がこれをボイコットする方針をとっていたからであった。

法廷は、この集会に、サルトルをはじめローラン・シュバルツ、ジャン・ミール・ポシェー、デイビッド・ルッセ、ピエール・ヴィダル・ナケ、ローラン・デーリンシャー、ローラン・デーリーなどを演壇に送った。集会は八千人の若人がつめかけ、会場に入りきれない人たちが会場の周囲を デモして回るほどの盛況であった。今年の二月になって、法廷の国際調査団がベトナムから帰るとこのような集会は、ほとんどすべての主要都市でもたれ、全国ベトナム委員会は急速にふくれ上って行った。

四月に全国ベトナム委員会の全国大会がパリで開かれた時には南北ベトナム代表がメッセージを送っただけではなく、フィデル・カストロのメッセージが、カストロ、ゲバラと並ぶキューバの民族的英雄メルベ・ヘルナンデスによって読まれて、この団体のフランスにおけるベトナム闘争にしめる重要性を物語っていた。そして、五月にこの委員会がドゴール政府のフランス領内における開催禁止にたいする抗議集会とデモを呼びかけた時には、平和委員会は、それまでの態度をやめて、ともに集会とデモを行なった。全国ベトナム委員会を無視し続けることが、ベトナム闘争に参加してくる大衆から見離されるようになったからであった。

国際戦犯裁判が、アメリカ政府などの妨害をのりこえてストックホルム法廷を開催できたのは、このようなベトナム反戦闘争と発展とが支えになっていたのである。

（本学経済学部教授）

映画評

「智恵子抄」

ニーチェは発狂寸前に哲学をつくりえた

テレビに追いつめられた映画界は高円寺化して、テレビのスーパーマーケット的安売業組にまねのできぬ特殊な商品を作り出そうとした。しかし、彼らが成し得たのは、客層を悪化させ粗悪品の乱造のみであった。松竹映画はそういった腐敗と環境の中で一つの環城を固守している（？）。それは女性中心の文芸大作と自ら銘打った一連の作品である。もともと、松竹は「君の名は」以来メロドラマで売ってきた会社である。松竹は「智恵子抄」を「君の名は」の人間的な持味をものの適合によって、智恵子としての彼女を成功させている。

しかし、丹羽の光太郎はいただけない。彼のニヒリズムと男性的なプロフィルはアーティストとしての気迫をあらわしはするが、過剰になりがちである。彼はメロドラマというわくの中で体を持ち来しているが、しかし彼のタンタンとした演技は、岩下の美しさ、悲劇性を盛り上げる上で大きな力となっていることは否定できない。智恵子は福岡県二本松町の酒造家の娘として生れ、日本女子大を卒業、雑誌「青鞜」の同人で絵画にも志し、彫刻家の夫、高村光太郎と貧しいながらも楽しいアトリエ生活を送った。

光太郎はニューヨーク、パリから帰朝後「スバル」の耳鼻的ふんいきにうつもれていたが、「白樺」の理想主義に目ざめる。ここにおいて、智恵子のはたした役割は大きい。彼自身「智恵子」抄で「かの女の純愛によって浄化され以前のデカダン生活から救い出された」とのべている。しかしかの女の純真さが皮肉にも、かえって精神の破綻を招く結果となり、昭和十三年十月東京品川ゼーム坂病院で帰らぬ人となったのである。その愛の思い出に満ち十九編の歌六首、二編の回想記を収めた詩集が「智恵子抄」である。

「智恵子抄」は愛と死の中でもかき、苦しみ、愛し、うったえ、そして、その歓喜と悲嘆のどうとの中に美しい愛のアウフヘーベンを見る。あまりにも純粋なその結晶を多くの人々は愛しつづけてきた。はたしてこの芸術を彼らはどこまで表現しえたであろうか。少くとも私には、彼らのなしえたことは、商業映画のわくの中で、無気力に泣いてみせることだけだったように思う。

さて、最後にふりかえって見て、何が一番印象に残ったかというと、やはり智恵子発狂と、それによる彼女の芸術の変化であろう。

セザンヌを下敷きにしたような絵に満心していた彼女が、その絵が落選してから、にわかに絵をやめ、家事に精出す。しかし、彼女は、発狂後においてはじめて自己を表現した。彼女の描く手カイな絵はまさに現代絵画に類似している。何というアイロニーだ。ニーチェは発狂寸前に哲学を作り得た。現代映画がもしも芸術を志すならば、すべての困習と、営利主義をふちこわさねばなるまい。しかし彼らにはできず得まい、彼らはとっくに去勢され映画の持つ芸術性を自からわすれさっている。そして半狂乱の者のみが映画芸術を悲見している。

新聞会活動を弾圧

学友会（民青系）が予算凍結

福島大経済学部信濃新聞会では

学友会を操る民青系執行部による編集権侵害の危機にさらされている。問題が表面化したのは、昨年十一月の弾劾会の席上「信濃新聞の百三号の記事は全般的に反日共反全学連（民青系）的なものが多く、その傘下で活動している学友会にとっては迎動を分裂させるものである。また新聞が〝むつかしく〟読みにくい」というまったくセクト的・非科学的な理由で新聞会を弾圧してきた。

こうした中で、五月二十日弾劾会が開かれ予算凍結の席上、学友会は「今後日本共産党学友会執行部を批判した記事を書いた場合、新聞会に対する予算は出さない」と自らのセクト的利害をあらわにし、新聞会の主体性を侵害する予算分割払いの検閲制をはじめている。

河田（弁論部）優勝

弁論部河田瞭美（法三）は、東北学院大学で五月二十七日、第十三回学長杯争奪全日本大学弁論大会において、現行刑法の全面的改正問題をとりあげ、必要性の是定を追求した「刑法の全面的改正は必要か」と題した弁論で優勝を獲得した。

建設者会議破産

学内民主化をスローガンに掲げ自治選に臨んで結成した建設者会議が、選挙後急速に学内民主化の運動へとエネルギーを転化しえず瓦解した。

〔解説〕去年の〝産学協同〟の社会学部新設に、新報社の主催した七月の大衆討論会で高揚を示しながら、それ以降社会学部設置に同調する学友会執行部と、闘わずに諸願要求署名活動にとり組んだ民青の状況に対して、不信を基底として、臨時学生大会に「社会学部設置反対闘争委員会設置案」を上程した一般学生グループが、今年の自治委員選挙に民主化をスローガンとして建設者会議として臨んだわけである。これは去年、学友会執行部、民青が、彼らを、可決された闘争委員会から排撃し、委員会さえ開かないという「権力をもつ八百長的狙撃行為」で、学生の権利、生活擁護さへ行われないとして、「学内の非民主的な状況の根底をうち破るため」の建設者会議を結成したにもかかわらず、それが選挙の敗北とともに瓦解していった。

これは昨年の学内の非民主的な状況の根底をうち破る運動として実体化しえなかったこと。すなわち権力の壁に見事にふっとんでしまったことと、壁に迫るだけの思想、実質的な大衆も組織しえなかったことを反省規定としてこれを否定されており、学生の直接的な参加そのものが本来的な自治活動の実体的な形成であるといえる。

事実ではあるが、学生の主体的力量と相互の意識変革をぬきにしては、「防衛」「反帝」は空語にしかすぎず、勤労学生の生活と権利の侵犯の現実を「大学の危機」「自治の危機」と現象面を唱え、それへの打開の実体化はとられえないばかりか、運動ある活動を提起しえなかった。

学生の参加がなくては、自治活動における現在的な具体的問題提起も実体的なものとして現在は拒否されており、学生の直接的な参加そのものが本来的な自治活動の実体的な形成であるといえる。

結果、この建設者会議は、「産学協同」「防衛」「反帝」を位置付け、さらに二部の学生自治を、早大、明大、高崎経大にみられた学校当局＝体育会の動向と同質の体育会組織を中心としての各利益団体の野合であると述べている。

彼らは、学友会を体制内化からの「防衛」「反帝」と位置付け、さらに二部の学生自治を、早大、明大、高崎経大にみられた学校当局＝体育会の動向と同質の体育会組織を中心としての各利益団体の野合であると述べている。

事実ではあるが、学生の主体的力量と相互の意識変革をぬきにしては、「防衛」「反帝」は空語にしかすぎず、勤労学生の生活と権利の侵犯の現実を「大学の危機」「自治の危機」と現象面を唱え、それへの打開の実体化はとられえないばかりか、運動ある活動を提起しえなかった。

学生の参加がなくては、自治活動における現在的な具体的問題提起も実体的なものとして現在は拒否されており、学生の直接的な参加そのものが本来的な自治活動の実体的な形成であるといえる。

パネルとして行動しえなかったことを意味するであろう。

さらに選挙の敗北をあいまいにすることによって、理論面、運動面での徹底的論争を行なわず、相互に意識変革を行なうといったことをせずにしたことによるものであろう。このことは、大衆追随のもとに相互意識変革をないがしろにすることを建設者会議が批判しえても、それと同次元でのせいぜい恥返しの反対極でしかなかったといえる。

しかしないのだ。

（前衛詩人協会々員、作家）

アメリカの青春

My College Life in America

岡地勝二著

ユーモアで綴った文章と随所に見られる鋭い批判の精神は、著者が素朴な青年であるだけに、既成のジャーナリスト、評論家というような人々の目を通してのそれとは異なった新鮮味と感銘とを読者に与えるであろう。

これから留学を志す青年にとっては何よりの参考書であり、また広く一般の人々にも一読を奨めたい好著である。

（森川学長）

大阪市浪速区西関谷町二の三（常盤ビル）

株式会社 京文社

電話（六四一）八三二七番

好評発売中！

定価 三六〇円

アメリカ留学生の体験記

アメリカ・ロータリークラブの奨学資金でジョージア大会に留学した著者は、アメリカの大学生活を通じて生々しい青年男女の生き方、考え方、そして恋愛などを、じかに肌で接してきた。ドキュメンタルな六十数枚の写真をそえて語るこの書は、そのままに現代アメリカ青年像の実態をえぐる問題作である。